

祖母の考現学

スケッチと行動・認識調査を通して可視化する
日常生活の魅力とその構造

北研究室 木村真優子

今和次郎が提唱した「考現学」は、現代の風俗や日常生活を観察し、記録・分析することを目的とした学問である。考現学調査において初めての組織的な採集を行った「一九二五年初夏銀座街風俗記録」では街行く人、展覧会の入場者などの服装を目視による採集で行った。^{*1} 今は考現学を 「『無意識な無自覚な状況』に光をあて、明確化するための記録づくりなのだとしている。」と述べる。^{*2} また、今が行った「下宿住み学生持物調べ」や「新家庭の品物調査」では、生活用品を詳細に記録している。考現学的調査の一つであるカケ茶碗のスケッチ ^{*3} は、茶碗の欠け具合をシンプルなスケッチで表現した。少しずつ異なる茶碗の様子を取り上げるユーモアと、採集にかける情熱が感じられる。筆者が卒業研究で考現学を取り扱いたいと思った要因の一つがこのスケッチである。

今和次郎の考現学の手法や姿勢は赤瀬川原平、藤森照信らによって発足された「路上観察学会」にも影響を及ぼした。路上観察学会では、都市空間に存在する意図せざる美的価値や不思議な存在を観察・記録の対象とし、その一環として赤瀬川は「超芸術トマソン」という概念を提唱した。後に「老人力」がうまれる場でもある。^{*4}

考現学のような些細な事象に目を向ける姿勢は、ジョルジュペレックやイーフトゥアンにも近いものを感じる。ペレックは現代社会において「当たり前すぎて意識されないもの」に注目する視点を提示した。ペレックが「生が眠っている」^{*5} と表現したように、人々は生活の中で事故や災害といった異常なことに敏感である一方、日常の中に埋もれた小さな出来事や物事に対しては意識を向けない傾向にある。この問題意識意に基づき、ペレックは「書くこと」を通して空間の再認識を試みた。ペレックの観察手法は「子供のような無邪気な態度」「素朴な疑問」を大切にしており、路上観察学会の調査態度とも通じる部分がある。

トゥアンは「空間の経験」内で人々の空間に対する認識の曖昧さを「たんに存在している」^{*6} と表現した。「場所」は「空間」が具体化したものであり、人は空間を自分のものにする（秩序付ける）ために場所を作り出すと示した。加えてトゥアンは「場所愛（トポフィリア）」を提示する。場所（トポフィリ）に人間と環境の情緒的な結びつき、愛着を付加した。空間に経験という具体性を含ませることにより場所になる。その経験が愛着、トゥアンが提唱する場所愛を形成する。

ペレックとトゥアンには時間、特に過去に対する扱いの違いはあるものの、いずれも日常の些細な事象や経験を取り上げようとする姿勢は共通である。

考現学、些細な事象の観察

研究目的と方法

本研究の目的は 2 つある。まず、消えてしまう実家の風景を残すことである。祖母は母屋の近くで野菜を育てていたが、ここ数年で住宅が何軒も建ったことが原因で畑を縮小し、現在では実家の周りは新築住宅で囲まれ少し閉塞感を覚える。母屋も将来的にリノベーションを計画していることもあり、このままでは祖母が作った風景は消えてしまうだろう。

次に先述の調査結果を基に祖母の魅力を明らかにすることも目的の一つである。

現在の空間を様々な方法で記録すれば祖母と筆者を繋ぐ思い出を形にして残すことができないだろうか。またそれが風景の新たな魅力、文化的価値の発見につながるのではないだろうかと筆者は考えた。

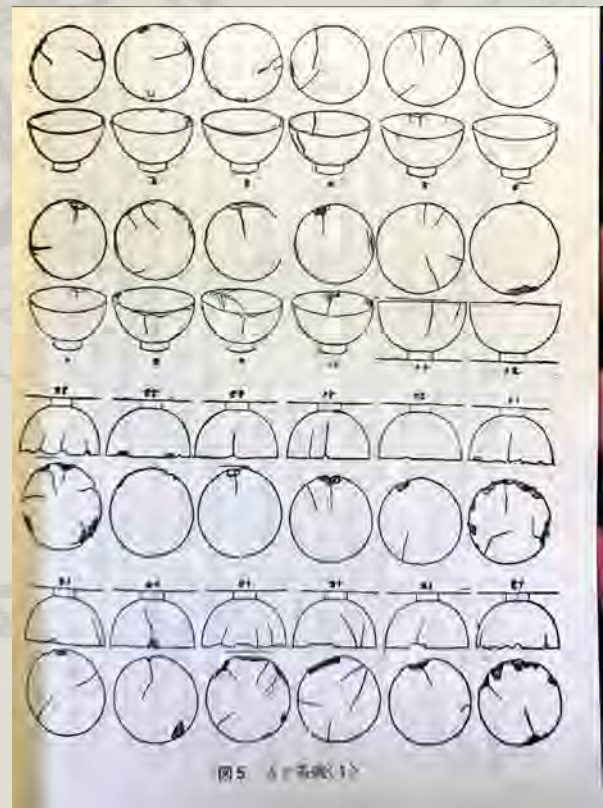
本研究では、約一年間にわたり、スケッチ・動線調査・ヒアリングを行った。スケッチは主に祖母の生活空間に存在する物品や動線調査で用いたネットワークカメラで記録された祖母の動作である。何れも筆者が「祖母らしい」と感じたものを採集している。動線調査は夏から冬に行った。カメラで記録された祖母の動きをパスに起こし、可視化した。ヒアリングはあらかじめシートを作成し、祖母の愛着があるような物品や空間について使用年月や好きなどところ、それにおける人間関係を調査した。

風景に溶ける老人力 日本の「いき」

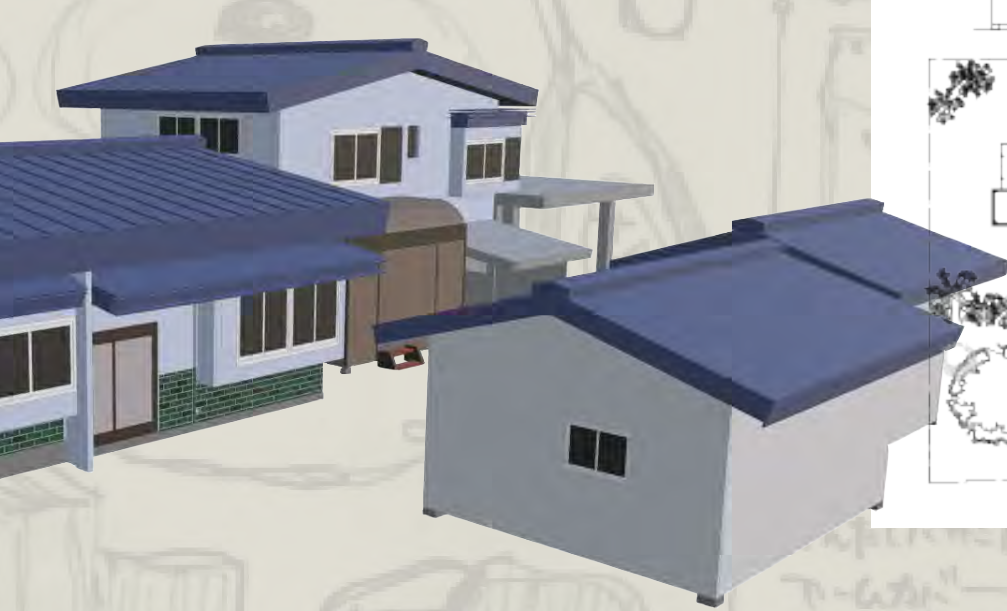
本研究では、調査手法ごとの分析に加え、赤瀬川原平が提唱する「老人力」と、九鬼周造が説く日本独自の文化の細分化を図る「いき」の構造をもとに、筆者が感じる祖母の魅力の分析を試みる。

老人力とは、「老い」や「衰え」をポジティブに捉えた価値観である。路上観察学会のメンバーである藤森照信と南伸坊は、赤瀬川のボケを新しい力と捉え、より積極的に評価する必要があるとして「老人力」と表現した。^{*7} 老人力には、忘れる力、無理をしない力、適度に諦める力が含まれている。老人力は必ずしも人だけに宿るものではない。モノが老人力を纏うことで骨董品として扱われ、味わいが生まれる。このように、経年劣化のような無意識の時間の流れが老人力を発現させる。この現象は日本文化における「侘び寂び」にも通じる。本調査では、スケッチによる観察で印象的だった「機能の喪失、そして再構築」を祖母の「諦める力」とモノに宿った老人力と併せて分析している。

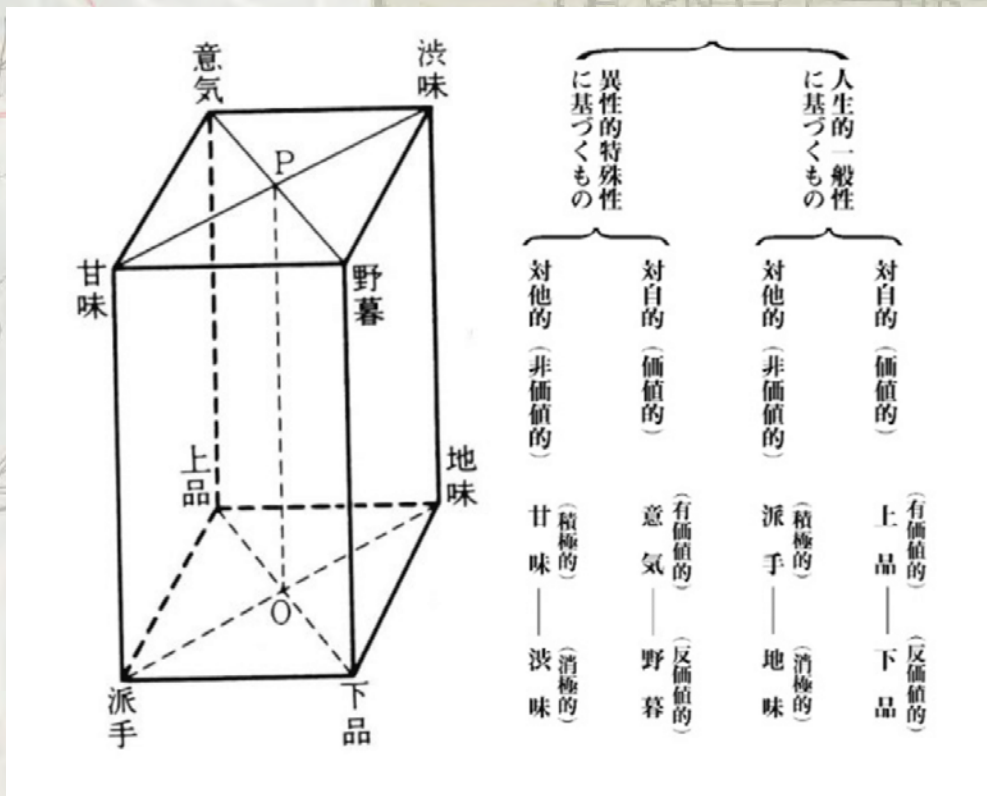
九鬼周造は日本独自の「いき」という美的観念の構造を説いた。「いき」に関する主要な意味として「上品」「派手」「渋味」を挙げ、それらの対立する意味を提示した。そして、それぞれの対立する意味との関係から「いき」の構造を図のように表現した。この立体は、「いき」に関する言葉を簡易的な図形として示している。本調査では、筆者が祖母の作り出した風景に対して感じた魅力をこの構造に当てはめる。その魅力が立体内でどのような図形を作り出すのか、または頂点間の移動によって生じるものなのかを分析する。



欠け茶碗多数



物に宿る老人力^{*8}

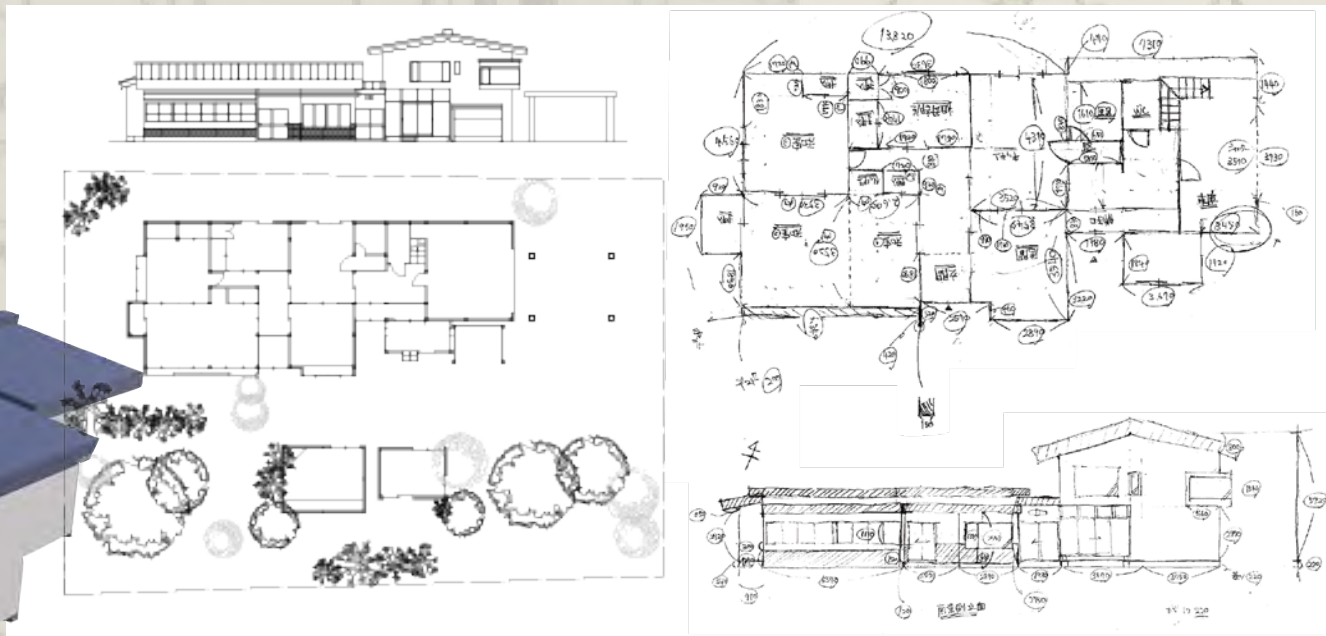


九鬼の「いき」の構造^{*9}

実家の風景は、祖母の好きなものや日常的な動作といった人柄が色濃く表れており、筆者の興味関心の原点である。青森県八戸市の実家には、母屋の玄関周辺に基礎に沿うように置かれた植木鉢があり、統一性がない。受け皿に食器を使ったものや、壊れた鍋を鉢として再利用したものがあり、観察するとそれぞれに表情があり、かわいらしい。母屋の向かいに建てられた長手約 2.3 間、短手約 2 間の小屋の内外には、祖母の料理器具や、いつ使うのか不明なものが所狭しと置かれている。敷地の奥にある庭には、風除けを目的に植えられた木々が成長し、現在では小さな森林のような景観を形成している。庭には迷路のような細い道ができており、これは低木や祖母の好きな花を植えたことで出来上がったもので、幼少期にはよく遊んだ。筆者が自然を好きであることや、地域独自の文化に興味を持つことには、祖母がつくった風景や祖母との思い出が強く影響している。幼い頃、筆者がコンプレックスに感じていた雑然とした風景は、大学生活を経た現在では魅力的に感じられる。

研究対象は、筆者の父方の祖母である木村ツギ子である。昭和 16 年 11 月 18 日生まれ。生まれは青森県三戸郡田子町で、昔ながらの田園風景が広がる地域だが、祖母が生まれ育った時代には周囲に何もなくったらしい。祖母の「何でも自分でつくる」という姿勢や行動力の原点は、ここに由来しているのだろう。祖父に嫁ぐ形で八戸市に移り住み、定年を迎えた後に母屋向かいに二軒の小屋を建てた。現在では、一つの小屋を物置兼料理小屋として利用しており、小屋の前には長年使われた調理器具や畑仕事の道具が置かれている。

祖母と実家について



かわいい老人の細分化

高齢者に関する研究が数多く存在するが、高齢者の魅力に関する研究となると非常に限られている。小原一馬氏の「かわいいおばあちゃん・女子大生の『かわいい』の語法に見られる、ライフコース最終期に関する社会の葛藤する価値観の止揚 -」では女子大生における「かわいい」という言葉の語法、特に、従来「かわいい」という形容がほとんど用いられなかったと考えられる年上の男性、中高年の女性（特に両親、高齢者）に対する「かわいい」の語法について調査を行っている。小原は老人に対する印象として、人類の最終到達点としての「賢者」のイメージと「厄介者」のイメージを挙げた。調査結果として、

①「かわいいおばあちゃん・おじいちゃん」という概念は先述の二つの印象の葛藤の止揚を確かに導いているが、それは老人を子供に見立てた保護対象として価値化するものではないこと

②年齢、性別を問わず、その無邪気さ・一生懸命さ・純粋な愛情・素直な生の感情表現、そしてユーモアといった、人間性の発露に出会ったときに感じられること ^{*10} がわかっている。「かわいい」と「魅力的」は、対象にポジティブな印象を抱いた際に使われる言葉である。筆者が祖母に感じる魅力を探る際、小原が提示した老人に対する対照的な印象や調査結果は、分析の重要な判断材料となる。

^{*1} 今和次郎 吉田謙吉、考現学採集（モデルノロチオ）、pp330-336

^{*2} 同上、p338 より引用

^{*3} 今和次郎、考現学入門、p298

^{*4} 赤瀬川原平、老人力、p12

^{*5} ジョルジュ・ペレック、何に注目すべきか？、水声通信二〇〇六年四月号、pp28-31

^{*6} 「空間の経験・身体から都市へ」イーフトゥアン p71 より引用

^{*7} 赤瀬川原平、老人力、pp8-12

^{*8} 赤瀬川原平、老人力、p209

^{*9} 九鬼周造、「いき」の構造、p19

^{*10} 小原一馬、「＜論文＞「かわいいおばあちゃん」：女子大生の「かわいい」の語法に見られる、

ライフコース最終期に関する社会の葛藤する価値観の止揚。」教育・社会・文化：研究紀要 7 (2000)、p31